6．人間観

6－1　人間の分類

6－1－1．性と年齢による分類

赤ん坊　アィアィ　ay'ay。

男の赤ん坊　オクカィ　アィアィ　okkay ay'ay。

女の赤ん坊　オペル　アィアィ　oper ay'ay。

ヘカチ hekaci 7、8歳の子ども。トオン　ヘカチ　ネウンペ　ダ？　toon hekaci neunpeだ？「あの子はどこの子だ？」。ヘカッタル hekattar子ども（ぞんざいな「荒い」言葉）；子ども達。

男：

コシポ kospo　15、6歳の未婚。

オクカヨ okkayo　30代までの若者。

オンネクル onnekur　5、60代の年寄り、本当の年寄りではない。

エカシ ekasi　本当の年寄り、偉い。普通の家の年寄りをエカシとは言わない。

女：

オペル oper　女の子ども

マッカチ matkaci　15、6歳の娘

ヘマンタ　ポン　マッカチ　アン　マ！ hemanta pon matkaci an ma「この童（わらし）！」と怒られる。

ポン　メノコ pon menoko　マッカチより年上の娘。

メノコ menoko　結婚した女、子どもが出来たら、皆からハポ hapoと呼ばれるのが普通。また、ルクネマッ ruknematとも。（嫁はコシマッ kosmat）

「若い」というのは、ペゥレ pewreだが、ペゥレには「柔らかい」という意味もある。例えば、ペゥレ　コルコニ pewre korkoni「柔らかいフキ」。（仔グマをペゥレプ pewrepとは言わない）。

「歳とった」というのは、オンネ onne、フチ huci　歳とった女。「育つ」はスクプ sukup。

［有珠、堀崎さく氏］

6－1－2．技能・性格による分類

マタギが上手な人を　イソンクル　isonkurという。漁がうまい人のことではない。

ヌツマシヌ nucumasnu「手早い」（カトゥ　モィレの反対）。

トランネ　toranne「からっぽやみ」（怠け者）。

「こころが悪い」「根性がわるい」ことを　ケゥトゥムウェン　kewtumwenという。ネプ　エ

アニ　ケゥトゥムウェン　nep eani kewtumwen「おまえはなんて根性が悪いのだ。」コシマッ　ケゥトゥムウェン　ワ　フチ　コル　エウェン　kosmat kewtumwen wa huci kor ewen「嫁は根性が悪く、姑をいじめる」

ウェンペ　wenpeとは、悪者、やくざのような者のことだ。ウェンペ　シルンペ　wenpe sirunpeといえば、「最低の者」ということだ。

ルハィタ　ruhayta　馬鹿。

エムコ　イサム　emko isam　半分足りない、はんかくさい。オトゥィペ　otuype　エムコ　イサム　と同じ、半分切れて、ないこと。

イヨタィペ　iyotaype　しつこく何度もものを尋ねる人。

イペチカリ　ipecikari　何でもガツガツ食べる人。ネプ　イペチカリ！nep ipecikari「ガツガツして、このほいと！」

カトゥ　モィレ　katu moyre「動作が鈍い」

テケ　ムツマシヌ　teke mucumasnu「手がきようだ」

パケ　トゥナシ　pake tunas　「機敏だ」

ワヤシヌ　wayasnu「利口だ」 孫婆さんは　シサム　タ　アムマ　ワヤシヌ　sisam ta amma wayasnu「和人は（なんでも作るから）利口だ」と言っていた。「口がうまい人」の意味でも使う。

イペエマカ　ipeemaka　「もの嫌いする」（食べ物に好き嫌いをいう）　タン　ヘカチ　イペエマカ　ワ！　tan hekaci ipeemaka wa「この子はもの嫌いする」

ヤィポロサンケ　yayporsanke「一人食いする」（おいしいものを人に与えないで、自分だけで食べる）

イペアプ　ipeap「物惜しみしないでみんなに分け与える」 ネプ　カッケマッ　イペアプ　nep katkemat ipeap.「あの奥さんはなんて物惜しみしないんだ。」

ヌー　トゥナシ　nu tunas　「早耳だ」

［有珠、堀崎さく氏］

6－1－3．身分・家系による分類

酋長さんは、お金持ち、偉いじいさんだ。酋長さんはアイヌ語で何と言うか知らない。コタンカラカムィ kotankarkamuy（？）とでもいうのか。

偉い人をヌプルクル nupurkurという。

［有珠、堀崎さく氏］

偉い人の奥さんはカクケマッ kakkematという。見て分かる。文身をして、眉も口も染めている。着物も昔なら良いもの（刺子）を着ている。黒糸で織りひもの裏をつけた高価なもので、よほどの人でないと着れない着物だ。自分の叔母が着ていた。偉い人の奥さんはまた風呂敷を三角にしてかぶる。普通の人はかぶらない。挨拶するときはとる。

［有珠、堀崎さく氏］

6－1－4．親族用語

親戚：イリワキ irwaki。「私の親戚」ク　コロ　イリワキ　ku kor irwaki。ウタリ utari　仲間（親戚でなくても）。ク　ウタリ ku utari私の親戚。

「兄弟姉妹」イルワキ irwaki。イルワキ　エチ　コロ　ワ？　irwaki eci kor wa？　「あなた、兄弟あるの」。

兄：ユポ yupo。「私の兄」ク　コル　ユポ　ku kor yupo

弟：「私の弟」ク　アキ　ku aki。ク　アキ·ヒ　ku akihi。「おまえの弟」エ　コルアキ　e kor aki。

妹：「私の妹」ク　マタキ　ku mataki。

夫：「私の旦那」ク　コル　ニシパ　ku kor nispa。

妻：「私の奥さん」ク　コル　カッケマッ　ku kor katkemat（入墨をしているような立派な人）。

［有珠、堀崎さく氏］

6－1－5．人名

命名

子どもには、初め名前を付けず、ポン　コシポ pon kospoとか、ポロ　コシポ poro kospo などと呼んだ。本当の名（戸籍上の名）を付けるのは小学校に入る頃だ。小学校の白井先生や、和人の開拓者の「にいま」さんが役所に通って、戸籍の手続きをしてくれた。

10歳くらいになるとあだ名を付ける。顔が長いからナヌ　タンネ nanu tanne、顎が長いからノヤピ　タンネ noyapi tanne、顔がみっともないからイポカシ ipokasi、頭が大きいからサパポロ sapa poro、のように付ける。背が高く、顔も長い女の子で、タンネ　マッカチ tanne matkaciというのもいた（マッカチ matkaciは「女の子」という意味のぞんざいな言葉だ）。どうしてだかわからないが、「隠す」という意味のヌィナ nuynaというあだ名の人もいた。

目が大きくてトチの実のようで、頭のまん中がはげていて、周りだけに髪が生えているのがヘビノタイマツのイモ（ラゥラゥ rawraw）に似ているのでシキトチラゥラゥ sikitocirawrawというあだ名のおじいさんがいた。

祖父のオナィ　エカシ onay ekasiという名は、アイヌの本当の名だ。アイヌの本当の名をどのように付けるかは知らない。

［有珠、堀崎さく氏］

豊浦の「酋長」は、モンジ・ツネゾウと言った。

礼文華にホッパさんという名前の人がいた。

［有珠、陸辺ミツ氏］

トットアシという名前の人がいた。「鳥がよちよち歩く。」という意味だ。

スコペタという名前の人がいた。正しくは、スワノ　スコップセタという。

［有珠、椎山厳氏］

6－2．身体部位名称

頭：サパ　sapa。頭が良い　サパ　ピリカ　sapa pirka。頭が悪い　サパ　ウェン　sapa　wen。禿げ頭　トントネ　tontone。頭を叩く　サパ　キクキク sapa kikkik。

髪：エトプetop。エトプ　タンネ　etop tanne　髪が長い。男も女も同じ髪型で、おかっぱに近く、まんなかで分け、毛先を切りそろえる前はあご先に当たるほどに伸ばし、後ろは襟首が出るように剃ってある。

額：ケプトゥル　keputur。

まつげ：シクラプ　sikrap。シクラプタンネ　sikraptanne　まつげが長い。そんな人は、シキ　ピリカ　siki pirka「目がきれい」という。

目：シキ siki～シク sik。目腐れ（目やにがたまっていること）シキ　ウェン siki wen。目をパチパチして(目をつむりつむり)合図しておしゃべりをやめさせることを　イウンテ　iunte という。今の人らが「シー」といって黙らせるのと似ている。「目の見えない人」シクナククル siknakkur。

耳：キサル　kisar。耳たぶ　キサルウンペ　kisar'unpe。耳孔　キサルプィ　kisarpuy。「私の耳」ク　コル　キサラ ku kor kisara。ネコナ　イキ　フミ　タ　ク　キサラハ　nekona iki humi ta ku kisaraha「私の耳どうしたんだ」。

昔のアイヌの人は、財産を守るためか、血族結婚も多かったので、兄弟で耳の聞こえない人などもあった。指の変な人も多かった。結婚もできないで自殺する人もいたものだ。

声の悪い人を見ると　キサラ　オタラ kisara otaraと言った。耳が響くという意味だ。

鼻：鼻水　エトル　etor。鼻水が出る　エトル　エトゥク　etor etuk。ネプヘカチ　エトル　タラワ　nep hekaci etor tarawa「なんで、あの子、鼻たらしてるんだ」　いびきをかく、いびき　エトロ　etoro。

口：パロ　paro。イテキ　イェー iteki ye　言うな。「悪口」ウェンペ wenpe、あるいはシルンペ sirunpe。オッチ otci　しゃべれない人で耳の聞こえない人。イタク　カ　エアィカプ itak ka eaykap　しゃべれない。

唇：パープシ　pápus。

歯：ニマキ　nimaki～ニマク nimak。「おまえの歯」エ　コル　ニマキ e kor nimaki。

歯が生える：ニマキ　エトゥク nimaki etuk。

まごばあさんの一番末の妹の子どもに姉妹でおしの子ができた。姉がお人好しで妹がいじわるで、姉は一緒にいられないで、室蘭のほうから歩いて虻田の私の育てのばあさんの家に来たものだ。くさとりや稗つきを手伝っていた。だから、私も手真似が上手になった。

舌：シタク　sitak。舌をだしている　シタク　エトゥク　sitak etuk～パル　エトゥク　par etuk。からい　パルカル　parkar。なんだ、からいな！ネプ　パルカル　アムマ　nep parkar amma。しょっぱい　シプポ　ルィ　sippo ruy，ルンヌ　runnu。すっぱい　スウクカキ　suukka-

ki。しぶい、にがい　シゥニン　siwnin。

唾：「唾を飛ばす」トプセトプセ topsetopse。

歯：ニマク nimak。

あご：ノヤビ　noyapi。あごが長い人　ノヤビ　タンネ　noyapi tanne.

首：レクチ　rekuci。レクチ　タンネ　rekuci tanne。のどが詰まる　レクチオシマ　rekuci osma。レクチ　ヌムバ　rekuci numpaして、ライケ raykeした（首を締めて殺した）。

ぼんのくぼ：サパ　コムベ　sapa kompe～サパ　コムベヘ　sapa kompehe.

手：テク tek～テキヒ　tekihi。手が冷たくてしびれる　テケ　レンネ　teke renne。

肘：シットキ　sittoki。

腹：ホニ　honi。

背：セットゥル　settur。

腰：イクケゥ　ikkew。

尻：オソル　osor。

足：チキリ　cikir。

膝かぶ：コクカサパ　kokkasapa。

骨：ポネ　pone。骨が痛い　ポネ　アラカ　pone arka。骨が折れる　ポネ　カィ　pone kay。自分の足の骨が折れる　ク　チキリ　ポネ　カィ　ワ　ku cikiri pone kay wa。お前の足の骨、折れているの、どうしたの？　エ　チキリ　カィ　ワ　ネコン　アムマ？　e cikiri kay wa nekon amma？

血：ケム　kem。

乳を飲む：トット　ヌンヌン　totto nunnun。

便：オソマ osoma「大便をする」、オソィネ osoyne「小便をする」、ヤィコオソィネ yaykoosoyne「寝小便をする」、オクィマ okuyma「忍び屁」、オクィマ　フラ　ユプケ　okuyma hura yupke「忍び屁の匂いがする」、オプケ　opke「ブッと屁をたれる」。

［有珠、堀崎さく氏］

6－3．身振り・仕草

刻む：タータ　タータ táta táta　は菜葉を刻むときなどにいうことば。

歩く：アプカシ apkas。

赤ん坊がはって歩く：ホニホニ honihoni。

走る：ホユプ hoyupu。

眠る：モコロ　mokor。ヘスイェ hesuye　居眠りする（座ったまま）hesuye koyaykus　頭をコックリしながら深く居眠りする。ヘムィムィ hemuymuy「怒って寝ている」。

横になる：hotke　横になる

むせる：オヤクットモオシマ oyakuttomoosma　水を飲んでむせる

喧嘩をする：ウコィキ ukoyki。イユコィキレ　iukoykire　他人を仲たがいさせる

女は、仕事をするときは片膝を立てるが、普通はおすわり(正座)していた。オマクケ omakke 尻を出して、しゃがんで座ること。オマクケしたらだめだと言われた。

「長居する」ことを　オソロタンネ osorotanneという。

お客になって行くとき、戸口の前で、女はエフ　エフ ehu ehuと言い、男は咳払いをして、案内を請う。

客は、男であっても女であっても、戸口でエフ　エフ ehu ehuと咳払いして戸を開けて入る。戸口から家の中をのぞいたらいけない。隣近所の家に遊びに行くときも戸口でイアンネ ianne？「おりますか？」と尋ねる。すると、家の人が、ネン　タ　アン　マ　nen ta an ma？「だれですか？」と聞く。誰かがわかったら、ホクレ　アフン！ hokure ahun！「早く入りなさい」、テーウン　エク！ téun ek！「こちらへ来なさい」と言う。

久しぶりのお客とは互いに肩や腕をさすり合ったり、両手を握り合ったりする。

窓から家の中をのぞくことをアウォインカリ awoinkarと言い、悪いことだとやかましく言われた。神様が窓から光を入れてくれるので、窓を大切にした。

食事が済んだら、男も女も、ハプハプ hap hapと言いながら、両手の手の平を上に向け、胸もとで上下に揺する。これが「ご馳走様」ということだ。

旅に出るとき、おばあさんが戸口で何かごもごも唱え事をしてくれたが、はっきり聞き取れなかった。

道で久しぶりの人に会ったとき、イランカラプテ irankarapteと言い合う。

年寄りの人たちは「ありがとう」と言うとき、イヤィライケレ iyayraykereと言っていた。また、オンカミ　オンカミ onkami onkamiとも言っていた。

［有珠、堀崎さく氏］

6－4．身体の世話

6－4－1．髪型・服装

子供の髪型：男の子は、額から後頭部にかけて剃り、周囲の髪を残す。特にびん（エピンピ epinpi)は長くする。女の子は、うず巻きの所を直径3cm～5cmほど丸く剃り、びんを長く垂らして、襟首を剃る。

［有珠、堀崎さく氏］

6－4－2．文身

昔の女の人は入墨（ヌイェ　nuye　染める）をしていた。奥さんになっているかどうかわかる。自分を育ててくれたばあさんはクチヤオナインカリと言う名で、「酋長」の奥さんだったので、手にも入墨をしていた。普通の人は手にはしなかった。銀の耳輪(ニンカリ ninkari)を3つも4つもしていた。普通の人はしない。

がんびの皮のすすで入墨をするそうだ。刃物で傷をつけてすすで色をつける。

育てのばあさんは眉毛をそって染めていた。酋長の奥さんだけ。口のまわりも耳の方まで染めていた。

［有珠、堀崎さく氏］

6－4－3．病気と治療

腹がいたい　ホニ　アラカ honi arka

イペ　カス　ワ　ホニ　アルカ ipe kasu wa honi arka「食べ過ぎで腹が痛い。」

下痢をする　オペークス opékus(オペークスは、水がジョージョー漏れることで、タアン　シントコ　オペークシ　ワ taan sintoko opékus wa「あの樽から水が漏れてる」)

風邪　オムケ omke

くしゃみ　エシナ　esna.　エシナ　コヤィクシ　esna koyaykus. 何度も続けてくしゃみがでること。

肺病をサムペ　ウェン sampe wenと言う。

重い病気　タスム tasum（人にうつる病気は　ウトゥルセ　タスム uturse tasum）

　　ネプ　タスム　タ　アン　マ？ nep tasum ta an ma？「何の病気か」

医者　トノ

看病する　カシ　オィキ　kasi oyki（カシ　ケウェ kasi keweは「弱いものをかばう」の意味）

体をぶつけるなどして泣いていると、孫婆さんが頭をなぜながら、イヌヌケ　アシ、イヌヌケアシ、オヨヨポタ　inunuke as, inunuke as, oyoyopotaと、なだめてくれた。意味は「かわいそうに、かわいそうに、悪いやつ飛んで行け。」ということだ。オヨヨポタというのは、子供を痛くした「悪者」を叱る言葉である。神様にも良い神様と悪い神様がいる。この時は悪い神様が悪さをしたので叱るのである。このオヨヨポタという言葉は、ふつうに子供や女を叱るときにも使う。タアン　メノコ　オヨヨポタ　taan menoko oyoyopota.「この女め。」

目にごみがはいったら　シントコ　レン　レン、チカプ　レン　レン、トオプ　オマン　ワ　イサム　sintoko ren　ren, cikap ren ren, toop oman wa isamと唱える。シントコは「桶」や「樽」のこと、チカプは「鳥」のこと、レンは「沈む」「沈め」、トオプ　オマン　ワ　イサム　は「遠くに行ってしまう」「飛んで行け」ということ。

昔は囲炉里を使っていたので、目を悪くすることが多かった。孫婆さんは目が痛くなると、私に　カムィ　ワクカ　kmuy wakkaという水を汲んで来させ、皿の中に入れて手ですくって目に当てて洗ったり（シク　フライェ　sik huraye)、てぬぐいに浸し、目の上を押し（ヌンパヌンパ　nunpa nunpa)、冷やす（ナムカ　namka)。カムィ　ワクカというのは、虻田のペトルル　petorurというところの鉱山から流れて来る赤い川(「赤川」また「フーレ　ペツ」 húrepetと呼ばれている）の水のことで、「あかくらさん」というお宮のそばの「やちけ」のあるところがきれいに澄んでいるのでそこから汲んできた。渋味のある水だった。

おばあさんは神経痛を患っていたので、八升樽に水を入れ、そこに炉で真っ赤に焼いた石を

入れ、樽の上に布をかぶせ、その中に足を入れて蒸気で蒸らした。

腰を病んでいる人は、ヘビに足をかまれたことのある人に腰を踏んでもらう。脚半(ホシ hos)をつけ、糸を通した針をそれに刺して、彫物のある杖をつきながら幾度も腰を踏む。

皮膚病などの治療。ひび割れになる、あかぎれになる　ペルケ　perke（「割れる」という言葉）お前の手があかぎれになった　エ　テケ　ペルケ　e teke perke。

シラミのことを　ウルキ　urki、ダニのことを　パラキ　parkiという。「がんべたかり」のことを　ウリキ　オ　ワ　サパ　ムニン　urki o wa sapa muninといった。ムニンとは、「腐る」こと。しまいには、カラスにつつかれたりしてかわいそうだから、酢で洗った。

ウルシに負けたら、サルカニ　sarkani（これはアイヌ語だ）というカニを手づかみでとってバケツにいれてもってくる。これの「かにみそ」をかぶれたところに塗る。

皮膚病になったらキトビロの葉を石油のがんがんで煮た湯で体をぬぐった。

水ぼうそうの治療。膿をもったみずぼうそうのために、体中が「ぼろくそ」になる。これを直すためには、木の下の落ち葉が腐ってぼそぼそになったものをさらしの袋に入れて、それを膿をもったところに置く。皮膚はフーレ　サランペ　húre saranpeのようにまっかになるが、膿は全部取れる。私は、種痘を受けたあと、膿をもったが、孫婆さんがそのように直してくれた。水ぼうそうの神はフーレ　カムィ　húre kamuyというが、この神は、水ぼうそうにかかったものが「臭いもの」を食べると怒る（カムィ　イルシカ　kamuy iruska）ので、ネギとかキトビロはたべない。以前はこの病を「とがめ」て山にちいさな小屋をつくり、そこに隠れて（ヤィウィナ　yay'uyna）、病をなおした。

はしかにかかると、体中がかゆくなる（マヤィケ　mayayke）が、爪を立てたらいけないので、ウサギ（イセポ　isepo）の後ろ足（膝から下の部分）でかゆいところを擦った。ウサギの足裏で擦る。私の息子が麻疹にかかったとき、孫婆さんがウサギの足を二本くれた。

体の一部分が熱を持ったら、畑からハコベを取ってきて、塩でもみ、熱を持ったところにはると熱が取れる。

ギョウジャニンニクの利用。キトビロ（ギョウジャニンニク、プクサ　pukusa）は、茎を刻んでパッチ　patci（鉢）に入れて置き、かぜをひいたときに土瓶で煎じて飲んだ。葉は編んで下げて置く。体に痛い所があればお湯に煮て、その煮汁で湿布する。キトビロのような干した薬草をサッケプ satkepという。

ほてった体を冷やすことをヤィメマムカ　yaymemamka　という。

ほうそう　フレ　カムィ　húre kamuy. ほうそうが流行だしたら、山に小さな家(ポン　チセ pon cise）をつくり、隠れた。

［有珠、堀崎さく氏］

病気にかかった人や、病弱な人は何かのさわり（ニシネカムィ nisnekamuy－ニッネカムィ nitnekamuyのことか？）があると考えて（ネプ　トゥレン nep turen「何かがさわっている」、それを取り除くため、トゥス tusuする人（カムィ　ランケ kamuy ranke）を呼ぶ。その人は、

神がのり移り、気違いのようになって話しだす。それを聞いて、薬を作ったり、お払いをしたりする。お払いをするときは、さわりのある人の体に網をかぶせて、鎌とヤナギの葉を持ってその上からさすり、「なぜ、この子についている？　早く離れて、神様になりなさい」ということを唱える。

［有珠、堀崎さく氏］

6－5．人の一生

6－5－3．出産・育児

出産

産気づくと、腹が痛くなる（ポー　エトゥク　ワ　ホニ　アルカ po etuk wa honi arka）。梁から帯をぶら下げて、産婦はそれにつかまって、床の上に座り、ふんばって出産する。産婦の後ろから腰を抱き支える人もいる。出産することをポーコル pókorという。

私の時代には、へその緒ははさみで切ったが、昔はタシロ tasiroで切った。それをするのは歳をとったおばあさん。

子どもを産んだ母親には、米のかゆ、卵、味噌などを食べさせる。初めのうちは、乳がでないが、赤ん坊に乳首を吸わせたり、乳房をもんでると、1週間のうちに乳が出るようになる。乳も乳房もトット tottoという。（トット　ヌンヌン totto nunnun「乳を飲む」）

3、4歳頃まで、乳を飲ませることが普通で、今より授乳期間が長かった。　赤ん坊の歯が生えてくる前頃からおもゆを食べさせた。私の叔母さんがもらい子をしたとき、私のおばあさんが、湯呑茶碗に玄米をうるかして、よくかんでさらし布でこし、こした汁を暖めて、おもゆを作った。少し大きくなると、木の株のような丸太で作った小さな臼で、うるかした玄米をつき（イユタ iyuta）、「粉（こ）おろし」（ふるい）でこした汁でおもゆを作った。私も、末の子を育てたときうるかした玄米をすりばちですっておもゆを作った。

おもゆを卒業するとき、ご飯を脂の少ない魚や、「がや」（パッチンカラ patcinkar）とともに柔らかく炊いた。5、6歳になると大人と同じものを食べさせた。

子守の揺り籠

赤ん坊を畑仕事に連れて行くとき、地面に寝かせたらアリに食われるので、シンタ sintaと呼ばれる揺り籠に寝せた。シンタはそりやかんじき（テシマ tesma）に似た形をしており、片端が反っていた。四隅に孔が開いており、紐を通し、三本の木を寄り掛けて立てたものを二脚作り、それに下げた。

家の中では、暖かい季節には深さ40cmほどの木の箱を梁から下げ、中に布団を敷いてその上に足を伸ばして座らせた。寒い季節にはエンチコ　enciko（日本語の「いじこ」）と呼ばれるわらで作った丸い揺り籠に入れた。エンチコには紐が付いていて、上を十文字に縛って、赤ん坊が飛び出せないようにした。おばあさんが、エンチコを揺すりながら、アフ　アス　アフ　ア ahu as ahu aと節を付けなが歌っていたのを見たことがある。

シンタやエンチコは上座のほうには置かない。

子守

赤ちゃんをおぶるときは、タナ tana（日本語の方言の「たな」、木綿の帯）で、和人がするのと同じようにおぶった。

しつけ

育てのばあさんから聞いた昔話。男の子が水汲みにやられた。炉縁や敷居をたたいて、「おまえ達は水汲みしなくていいな」といったら、神様が怒って、月に連れて行かれて、ずうっとそこで水汲みをやらされているのだそうだ。月はチュプ　cupという。

アイヌの人で子どもの無い人は、和人で子どもを育てられない人から貰い子をした。育てのばあさんも子どもがなく、貰い子ばかりだった。

子供の手伝い。「子供の頃のことで何を一番覚えているか。」という問いに、「養われながらも使われて苦労したことだけを覚えている。起きるとすぐ粟つき。寝床の中からまかなって（服を着て）、薪あつめ（柳の枝を集めた）、学校に行くのにも『やたらさす』（足袋の底に針を刺して固くする仕事）を持って行かされた。どさんこ馬に乗って草刈りにも行かされた。

子供の遊び

子供のときした遊びは、ほとんど和人の子供と同じ遊びだった。

あやとり：さかづき、ほうき、くびきり、はしご、お月さん、はさみなどの形を作る。

あやつき（お手玉）：袋に小豆を入れてお手玉を作る。

おはじき：ガラスのおはじきでした。

竹割り：桶屋から竹をもらってきて、25cmの長さのまっすぐな棒を作り、４～６本をそろえて手に持ち、放り投げては、またそれをそろえて受け取る。「ひとなぎ、ひとかえし、ひとたち、ふたなぎ…」と唱えて、放り投げる。

けんだま：今のけんだまと同じ形をしている。

スケート：竹を反らしてスケートを作った。

石蹴り：地面にいくつかの丸い輪を書いて、四角い板切れを投げ入れた。

いも焼けた：ゴムまりをぶつけあう遊び。鬼が「いもやけた」と５文字言う間に鬼から離れる。鬼が言い終わったら、そこで止まる。

かくれんぼ

竹馬

かっくい：長さ30cm、太さ３cmの棒（カシワやナラの固くて重い棒）の先を尖らせて、順に地面に刺す(順番はじゃんけんで決める)。相手の刺さっている棒を倒して自分のが地面に刺さったら、その倒した棒は自分のものになる。相手の刺さっている棒が倒れず、自分のも刺さったまま倒れなかったら引き分け。相手の棒も自分の棒も両方倒れても、引き分け。

戦争ごっこ：男の子が刀を帯に刺して陣に分かれてしていた。

ビー玉

じんば（騎馬戦）

輪回し：竹の輪を針金で押して廻して歩く。

ぱっち（めんこ）

大人の遊び

ぱっち（花札）

糸っぴき（糸引き）：遊ぶ人数が５人なら５本の糸を用意する。そのうち、一本にだけ木の札を付ける。親が５本の糸を一つにして、ぱっと床に投げ、各自が好きな糸の端を引く。札の付いた糸を引き当てた者の勝ち。おばあさん達が夏、葡萄棚の下でやっていた。

［有珠、堀崎さく氏］

６－５－６．葬制

死ぬ　ライ　オマン ray oman。オンネ onneともいう（オンネは、歳のいったことにもいう）。

男には刀を持たせ、女にはかまど道具一切を持たせて葬る。

６－５－７．祖先供養

イチャルパ icarpaは先祖供養のこと。じいさんは家の中でカムィノミ kamuynomiをし、ばあさんは家の外のきれいなところに先祖（親、子供）の名を呼びながら、団子にする粉を少しまく。手でも箸でも良い。ヌサ（nusa　祭壇）の方ではない。イナゥ（inaw　御幣）もなにもない。じいさんがカムィノミをしている間にやる。じいさんは家の中で、ロルンプライ（rorunpuray 神窓）を開け、供え物をおいてヌサの方へ向かってお祈りする。それから外のヌサの方へ行ってカムィノミする。子供の頃見たことだからうろ覚えだ。

［有珠、堀崎さく氏］

６－７．交易

他所者は、オヤウンペ oyaunpeという。他所から来た人は、オヤウンクル oyaunkurという。内地から来た外来者は、フーレシサム húresisamという。

子供の頃は、いつもアイヌだからといじめられた。それで、アイヌということを恥ずかしく思い、またそれを恨んでおがった（育った）。こんなにいじめられるアイヌというのは、いったいどこからきたのかと、いつもふしぎだった。

フーレ　シサム　húre sisam　「外国人」

［有珠、堀崎さく氏］